

漢薬「地丁」の生薬学的研究 (第9報)¹⁾

本草文献学的考察

布目慎勇, 難波恒雄*

富山医科薬科大学和漢薬研究所

Pharmacognostical Studies on the Chinese Crude Drug "Diding" (Part IX)¹⁾

Herbological Investigations on Diding

SHINYU NUNOME and TSUNEO NAMBA*

Research Institute for Wakan-Yaku, Toyama Medical and Pharmaceutical University,
2630, Sugitani, Toyama, 930-01

(Received July 1, 1983)

A description on the crude drug, "Diding" (地丁), appeared in Tai-Ping-Sheng-Hui-Fang (太平聖恵方) of the ancient chinese herbal literature (Song dynasty). Since then, a variety of plants have been used as "Diding" and their botanical sources of "Diding"s are uncertain in the literatures published before Zhi-Wu-ming-Shi-Tu-Cao (植物名実図考). In the modern literatures 50 or more species (28 genus of 14 families) are described as the botanical sources of "Diding"s. They were *Viola* spp. (Violaceae), *Amblytropis* spp. (Leguminosae), *Corydalis* spp. (Papaveraceae) and *Polygala* spp. (Polygalaceae). "Zihuadiding" (紫花地丁), "Diding"s with violet flowers, described in Ben-Cao-Gang-Mu and Ben-Cao-Yuan-Shi (本草原始) seems to be derived from *Amblytropis* spp. In Zhi-Wu-Ming-Shi-Tu-Cao, four "Zihuadiding"s are described. One of them is the "Zihuadiding" as cited from Ben-Cao-Gang-Mu. Others seem to be *Viola* spp., *Polygala* spp. and *Scutellaria* spp. (Labiateae).

Keywords—Ben-Cao; Diding; Zihuadiding; Ben-Cao-Gang-Mu; Pugongcao; *Amblytropis*; *Viola*; *Corydalis*; *Polygala*

地丁は『太平聖恵方』²⁾に記載された処方中に初見し,「治一切悪瘡。丁腫毒瘡人不識者。地丁散方。地丁, 麝虫…」とある。本草書では『本草衍義』³⁾に蒲公英の別名として記載されたのが最初で, その基源は『証類本草』^{4a,5a)}の系統の付図 (Fig. 1) からキク科 Compositae の *Taraxacum* 属植物と思われる。その後多くの植物が地丁として記されるようになり, 基源はきわめて複雑化してき, 14~15世紀にはすでにその傾向がみられる。例えば『滇南本草』には羊乳地丁^{6a)}, 白花地丁^{6b)}, 紫花地丁^{6c)}, 黄花地丁^{6d)}, 『医方類聚』には紫花地丁^{7a)}, 地丁草^{7b)}, 蒲公英 (黄花地丁)^{7c)}, 紫花地丁 (一名米布袋)^{7d)}, 紫花地丁 (羊蹄根)^{7e)}, 黄花地丁^{7f)} などが記されている。しかし明代では地丁の基源について記載した本草書は少なく, さらに『本草綱目』に記された紫花地丁^{8a)}はのちにしばしば引用されるが, その記述は不明瞭であり, 基源の考察が行われていない。

清代後半に出版された『植物名実図考』には『本草綱目』の紫花地丁の記文を転載^{9a)}したほか, 別項に紫花地丁が収載^{9b)}されており, このものは付図 (Fig. 2) からシソ科 Labiateae の *Scutellaria* 属植物と思われる。また董董菜^{9c)}および瓜子金^{9d)}の項にも別名として紫花地丁が挙げられており, その記文, 図から前者 (Fig. 3) は明らかにスミレ科 Violaceae の *Viola* 属植物であり, 後者 (Fig. 4) はヒメハギ科 Polygalaceae の *Polygala* 属植物である。このように『植物名実図考』には4種の紫花地丁が挙げられているが, 近代の文献には TABLE I^{10~20)}, TABLE II^{21~39)}に示したごとく, 非常に多くの地丁類が記載されている。

日本では貝原篤信が『大和本草』⁴⁰⁾で紫花地丁にスミレをあて, 以来ほとんどの書籍で地丁, 紫花地丁にスミレ類を記している。

以上概説したごとく、非常に多くの植物に地丁の名が付され、整理されないまま現在に至っており、しかも地丁の基源の考証は未だなされていない。そこでこれまで文献に記載された地丁を整理し、また『植物名実図考』およびそれ以前に本草書に収載された地丁について、その基源の考察を行うことを試みた。

1. 名 義

李時珍^{8b)}は「案土宿本草云金簪草一名地丁，独脚如丁故以名之」と釈し、李中立^{41a)}は「根直如釘故俗每呼為紫花地丁」と述べ、その形態に由来した名義を記している。地丁は丁瘡，悪瘡を主治するものであるが，丁瘡に関して『諸病源候論』⁴²⁾では「瘡下深孔如火釘穿之状，初作時突起如丁蓋，故謂之丁瘡」とその名義が記されている。このことから地丁の名称および薬効は丁瘡に由来するようと思われる。即ち丁瘡は病巣が釘状を呈することから，この治療に際し根が釘状を呈する植物に地丁の名を付し，丁瘡に応用するようになったと考えられる。『本草衍義』³⁾に記された蒲公英即ち地丁の基源と思われる *Taraxacum* 属植物の根はこの名義に一致し，また前報で述べた *Viola*⁴³⁾ 属，*Polygala*¹⁾ 属，*Corydalis*¹⁾ 属およびしばしば地丁の基源として挙げられる *Amblytropis* 属の各植物の根もほぼこの名義に当て嵌まる。しかし市場に出廻っている *Osbeckia* 属地丁¹⁾，あるいは『本草原始』^{41b)}に記された草蓴蓉の別名の紫花地丁は根がひげ根状であり，茎が直線状を呈することから，むしろ地上部の形状に対して地丁の名が用いられたように思われる。

また地丁にはしばしば接頭語が付されるが，これは多種類の地丁が各地に出廻ったため，それを特徴づける語を冠したのであろう。最も多くみられるのは花の色に由来する紫花地丁であり，主として *Viola* 属植物に用いられ，他に *Polygala* 属，*Gentiana* 属，*Amblytropis* 属，*Astragalus* 属，*Corydalis* 属などの植物にもこの名が用いられる。その他 *Taraxacum* 属のものを黄花地丁，*Polygala* 属のものを藍花地丁，*Polygonum* 属のものを紅花地丁，*Viola patrinii* を白花地丁などと呼んでいる。また植物の形状の類似性から *Polygala* 属のものを竹葉地丁，*Amblytropis* 属のものを蘿蔔地丁，味覚の点から *Corydalis* 属のものを苦地丁，*Amblytropis* 属のものを甜地丁，産地に基づいて *Gentiana* 属のものを華南地丁，植物名を付して *Viola* 属のものを莖菜地丁，*Gentiana* 属のものを龍胆地丁，*Amblytropis* 属のものを米口袋地丁，*Corydalis* 属のものを布氏紫堇地丁などと呼んでいる。

2. 薬 効

『太平聖恵方』²⁾には「地丁散方」として「治一切悪瘡。丁腫毒瘡人不識者」とあり，地丁のほか15味の薬物が記されている。地丁の薬効は TABLE III^{44~47)}に示すごとく丁腫，悪瘡に集約できる。各種医方書に収載された地丁を含む処方方を以下に示す。

『医方類聚』^{7a)}「消毒散（紫花地丁，他4味），丁瘡毒氣入腹昏悶不食」

同上^{7a)}「丁腫垂死，紫花地丁草」

同上^{7b)}「葶麻散（地丁草，他8味），治丁瘡」

同上^{7d)}「薰惡瘡方，地丁」

同上^{7e)}「四圍敷藥（紫花地丁，他22味），治壹應諸惡瘡并脚疾」

同上^{7f)}「外用潰毒藥（黄花地丁，他6味），治諸腫毒堅硬不消」

『証治準繩』^{44a)}「雄麝湯（地丁草，他18味），解疔毒如神」

同上^{44b)}「破棺丹（紫花地丁，他9味），治疔瘡走黃不止」

同上^{44c)}「紫花地丁散（紫花地丁，他6味），治諸惡毒瘡腫痛」

同上^{44d)}「託裏金銀地丁散（紫花地丁，他19味）治諸惡瘡腫毒疼痛」

同上^{44e)}「地榆防風散（地丁草，他3味），治風在半表裏頭微汗身無汗身無汗不可發汗并治表裏」

『医宗金鑑』^{48a)}「五味消毒飲（紫花地丁，他4味），治疔瘡」

同上^{48b)}「七星劍（地丁香，他6味），治疔瘡」

『医学入門』⁴⁹⁾「洗毒散（紫花地丁草，他7味），治諸般惡瘡及風濕陰蝕瘡」

『清宮秘方大全』⁵⁰⁾「疥癬化毒湯（地丁，他14味），疥癬皮頑之症，一切浸淫潰爛日久纏綿之症」

これらの処方方はほとんどが疔腫，悪瘡に応用されるところから，地丁が主薬をなしているものと考えられる。

ところで地丁には丁腫，悪瘡を主治するもの以外に薬効の異なる地丁もみられる。すなわち『滇南本草』には「羊乳地丁：治寒熱往来，子午潮熱，散風寒，解汗」^{6a)}，「黄花地丁：消痰，定喘，止咳嗽」^{6d)}とある。羊乳地丁は以後これに類する名称および薬効の記載がみられない。また黄花地丁の薬効に類似するものとして，近年，『上海常用中草药』²⁹⁾の竹葉地丁の項に一部その記載がみられ，「竹葉地丁：活血，消腫，解毒，化痰，跌打損傷，胸痛，咳嗽痰多，咽喉腫痛，蛇咬傷」とある。その基源として *Polygala japonica* があげられているが，このものの花の色は帯紫色で

あり、黄花地丁とは異なるものである。他の成書には鎮咳、祛痰に類する薬効を記したものは見あたらない。従って『滇南本草』に記された羊乳地丁、黄花地丁の基源が何物であるか全く推定はできないが、丁腫、悪瘡を主治する地丁とは基源の異なったものであろう。

一方 *Taraxacum* 属を基源とする蒲公英即ち地丁は、丁腫、悪瘡を主治する地丁とはやや系統が異なり、乳癰腫に应用するのが特徴である。蒲公英は『新修本草』⁵¹⁾に初めて記載され、「蒲公英味甘平無毒主婦人乳癰腫……」とあり、『図経本草』^{4a,4b)}では「療婦人乳癰又瘡以傳瘡皆佳又惡刺狐尿刺」とある。『本草衍義』には蒲公英の別名として地丁が記されているが、これは *Taraxacum* 属植物の根が釘状を呈するため、地丁の名が用いられたのであろう。以後蒲公英の応用範囲は次第に広がり、『中藥大辞典』^{20b)}には「〔功用主治〕清熱解毒，利尿散結。治急性乳腺炎，淋巴腺炎，癰瘰，疔毒瘡腫，急性結膜炎，感冒發熱，急性扁桃體炎，急性氣管炎，胃炎，肝炎，胆囊炎，尿路感染。」と記されている。

地丁の使用部位、使用法に関する記載 (TABLE III) は少ないが、清代まではほとんど、根または根茎を外用、内服または薫じて使用している。一部には葉を使用した例もみられ、『本草綱目』の紫花地丁の項では『普濟方』を引用し、「箭頭草葉，入醬少許，研膏，点入取吐。」と記され、『植物名実図考』では董董葉の項^{9c)}に「根，葉搗傳諸腫毒」とある。以後の諸成書に記された各種地丁は大部分がその全草を外用または内服として使用している。したがって地丁は古来一般に根を用いていたものが、近代になって地上部も用いるようになったものと思われる。しかし薬効に関して、地丁が丁腫、悪瘡を主治する点では大きな変化はみられない。但し『中藥大辞典』に「〔功用主治〕清熱利湿，解毒消腫。治疔瘡，癰腫，癰瘰，黃疽，痢疾，腹瀉，目赤，喉痺，蛇毒咬傷。」^{20a)}とあるように、その応用範囲は広がってきている。

3. 明代までの地丁について

明代までの地丁に関する本草書は『本草衍義』、『滇南本草』、『本草綱目』、『本草原始』に代表されており、他の本草書はほとんどがこれらを引用したものである。そこで上記の本草書に記された地丁を中心に考察を行った。

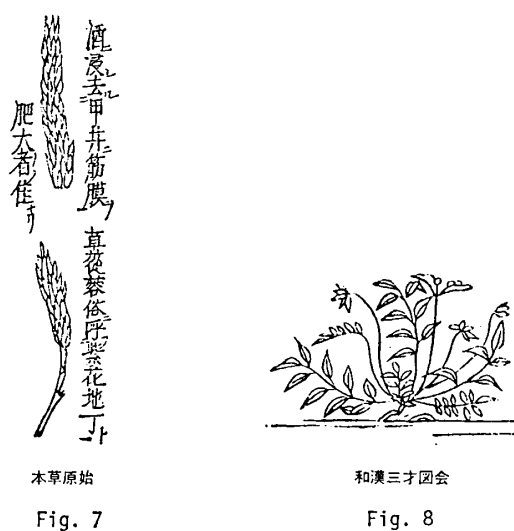
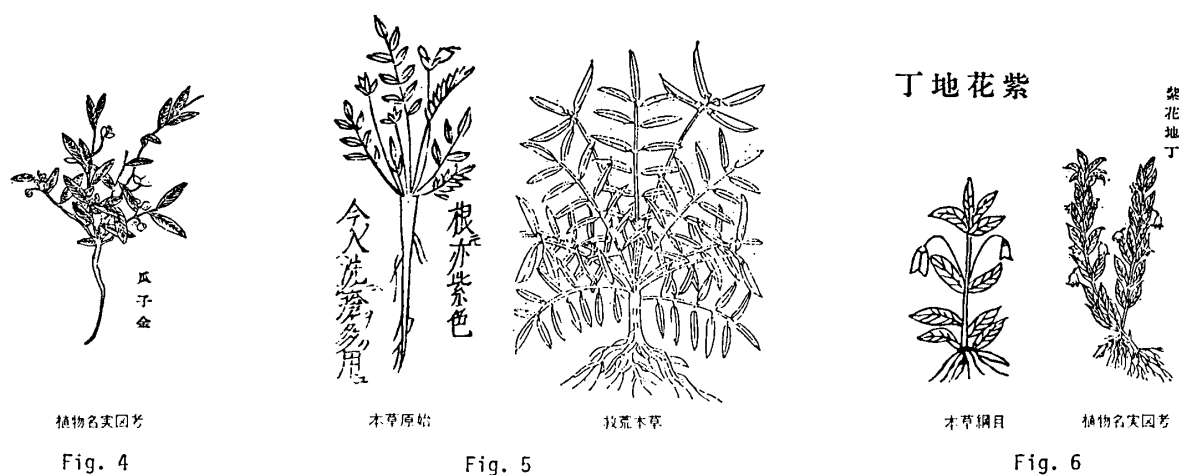
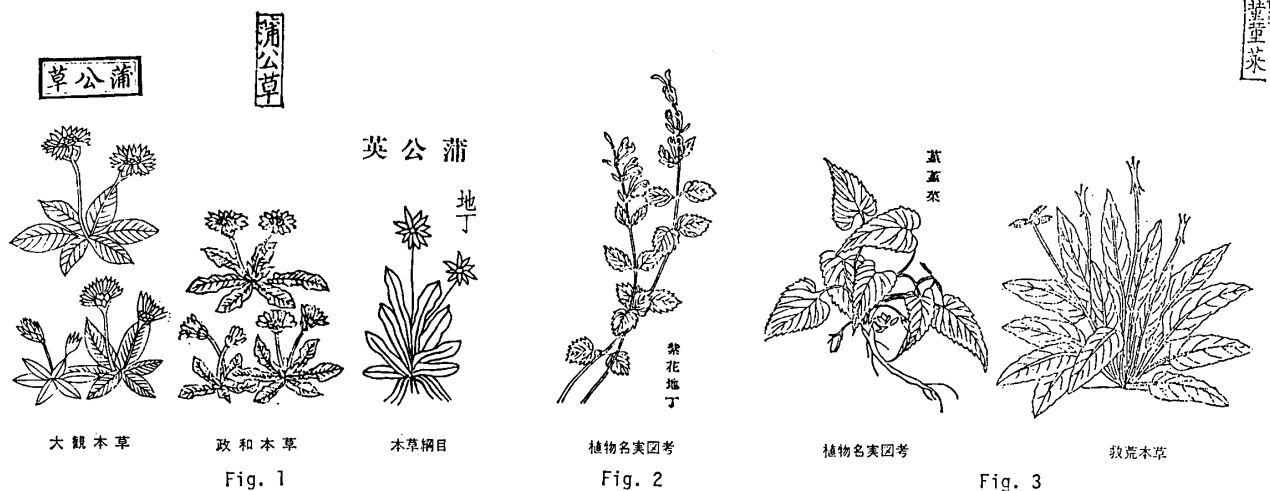
宋代では地丁の記載は『本草衍義』³⁾に「蒲公英今地丁也，四時常有花，花罷飛絮，絮中子有落處即生，所以庭院間亦有者，蓋因風而來也」とある。『名医別錄』^{4a,5b)}の蒲公英の項には「蒲公英味甘平無毒，主婦人乳癰水煮汁飲之及封之立消一名構橐草」とあり、『証類本草』の系統にみられる付図 (Fig. 1) は明らかに *Taraxacum* 属植物と思われる。『本草衍義』の記載とも一致する。また蒲公英は『図経本草』に「蒲公英……俗呼為蒲公英訛為僕公瞿是也」とあるように、以後しばしば蒲公英として記されるようになった。

明代前半に出版された『滇南本草』には羊乳地丁、白花地丁、紫花地丁および黄花地丁が収載され、また別項に蒲公英が記載されているが、この項に地丁の名はみられない。『滇南本草』では蒲公英と黄花地丁は別項に扱っているが、『本草綱目』では蒲公英の積名として構橐草、金簪草、黄花地丁を記している^{8b)}。『滇南本草』には黄花地丁の項^{6d)}に「黄花地丁，味苦，微辛，性寒。發散瘡癰。解瘡毒腫痛。入肺，消炎，定喘，止咳嗽，〔肺癰等症〕。（單方）治久遠咳嗽，痰喘氣粗，〔喉内如拽鋸之声〕，夜臥不寧。」とあり、『本草綱目』には蒲公英の項に「苗〔氣味〕甘平，無毒。〔主治〕婦人乳癰腫，水煮汁飲及封之，立消。解食毒，散滯氣，化熱毒，消惡腫，結核，丁腫，瘡牙，烏須髮，壯筋骨。白汁塗惡刺，狐尿刺瘡，即愈」と述べている。『本草綱目』の記文は『証類本草』を引用したものが多く、またその付図^{8c)} (Fig. 1) は *Taraxacum* 属植物を示している。しかし『滇南本草』にいう黄花地丁は『本草綱目』に記された蒲公英とは気味および薬効が異なっていることから、*Taraxacum* 属以外のものであろう。なお蒲公英の詳細な本草考察については別報で述べる予定である。

紫花地丁は各種成書に記載された地丁の中で最も多く見受けられる。『滇南本草』の「紫花地丁」の項^{6c)}には「紫花地丁，味苦，性寒。破血，解諸瘡毒。攻癰疽腫毒。治疥癩癰瘡，〔九種痔瘡〕，消腫。（單方）治小兒走馬牙疳，潰〔爛〕〔腥臭〕……」（叢本），「紫花地丁，〔即〕丁蒿，一名地丁。今處處有，苗覆地，有五色，紫花者多用入藥。氣味苦，辛，〔性〕寒。無毒。〔破血〕。主治一切癰疽發背，〔痔漏〕，疔腫癰瘡，無名腫毒惡瘡。服之，点無灰酒下。」（範本）とある。叢本および範本の紫花地丁は癰疽，腫毒，悪瘡などに应用する点で共通しているが、形態に関する記載、付図はなく、これらが何物であるかは全く不明である。

『医方類聚』には丁瘡，悪瘡，腫毒などに应用される種々の処方中に紫花地丁の名が散見される。また「紫花地丁一名米布袋」^{7d)}，「紫花地丁即羊蹄根」^{7e)}と記されているところから、当時すでに何種かの紫花地丁が出廻っていたことが窺える。米布袋ののちしばしば紫花地丁，地丁などの別名として記されるが，羊蹄根が地丁として記載された例は他に見あたらない。

『本草綱目』には紫花地丁が記載^{8a)}されており、その基源は明らかにされていないが、以後の成書にしばしば引用



されている。李時珍は紫花地丁の積名として箭頭草，独行虎，羊角子，米布袋を挙げている。箭頭草は『救荒本草』の董董菜の項^{52a)}に「董董菜一名箭頭草生田野中苗初搗地生葉似鉞箭頭様而葉蒂甚長其後葉間攢葶開紫花結三瓣蒴兒中有子如芥子大茶褐色葉味甘」とあり，その付図 (Fig. 3) から明らかに *Viola* 属植物である。また米布袋は『救荒本草』に「米布袋生田野中苗搗地生葉似澤漆葉而窄其葉順莖排生稍頭攢結三四角中有子如黍粒大微匾味甘」とあり^{52b)}，付図 (Fig. 5) からマメ科植物と思われ，『中藥大辞典』では *Amblytropis multiflora* BGE. をあてている^{20a)}。なお独行虎，羊角子の名称は他に記載例が見あたらず，来源は不明である。そこで『本草綱目』に記された紫花地丁の基源

TABLE I. 近代の文献にみられる地丁の基源植物

	名	称	基	源	植	物
植 物 名 彙 ¹⁰⁾	黄花地丁		<i>Corydalis pallida</i>		Papaveraceae	
	紫花地丁		<i>Corydalis bungeana</i>		Papaveraceae	
	紫花地丁		<i>Gentiana squarrosa</i>		Gentianaceae	
	紫花地丁		<i>Scutellaria indica</i>		Labiatae	
	紫花地丁		<i>Viola patrinii</i>		Violaceae	
台湾民間薬用植 物誌 ¹¹⁾	たいわんやのねすみれ (紫花地丁)		<i>Viola oblongo-sagittata</i> var. <i>violascens</i>		Violaceae	
	ひめのぼたん (地丁)		<i>Osbeckia chinensis</i>		Melastomataceae	
	たんぽぽ (地丁, 地丁花, 地丁草, 黄花地丁)		<i>Taraxacum platycarpus</i>		Compositae	
和漢薬標本目録 ¹²⁾	紫地丁, 地丁 (紫花地丁)		<i>Amblytropis multiflora</i>		Leguminosae	
Chinesische Drogen ¹³⁾	紫花地丁		<i>Amblytropis multiflora</i>		Leguminosae	
			<i>Astragalus scaberrimus</i>		Leguminosae	
			<i>Viola</i> spp.		Violaceae	
			<i>Gentiana detonsa</i>		Gentianaceae	
			<i>Swertia</i> sp.		Gentianaceae	
和 漢 薬 名 彙 ¹⁴⁾	紫花地丁 (地丁)		<i>Amblytropis multiflora</i>		Leguminosae	
			<i>Astragalus scaberrimus</i>		Leguminosae	
			<i>Viola lactiflora</i> <i>Viola</i> spp.		Violaceae	
			<i>Gentiana detonsa</i>		Gentianaceae	
			<i>Swertia</i> sp.		Gentianaceae	
中 薬 志 ¹⁵⁾	米口袋 (地丁花, 米口袋地丁, 地丁 草)		<i>Amblytropis multiflora</i>		Leguminosae	
	紫花地丁 (地丁草, 堇菜地丁)		<i>Viola yedoensis</i>		Violaceae	
	犁頭草 (地丁草, 堇菜地丁)		<i>Viola japonica</i>		Violaceae	
	布氏紫堇 (地丁, 苦地丁, 紫花地丁, 布氏紫堇地丁)		<i>Corydalis bungeana</i>		Papaveraceae	
	華南龍胆 (地丁, 華南地丁, 龍胆地 丁)		<i>Gentiana loureirii</i>		Gentianaceae	
	紫花地丁		<i>Amblytropis stenophylla</i>		Leguminosae	
			<i>Amblytropis brachyptera</i> var. <i>elongata</i>		Leguminosae	
			<i>Viola grypoceras</i>		Violaceae	
			<i>Vicia amoeana</i>		Leguminosae	
	竹葉地丁		<i>Polygala japonica</i>		Polygalaceae	
	紫花地丁		<i>Polygala sibirica</i>		Polygalaceae	
	地丁 (黄花地丁)		<i>Taraxacum</i> spp.		Compositae	
薬 材 学 ¹⁶⁾	紫花地丁 (地丁草)		<i>Viola yedoensis</i>		Violaceae	
東北薬用植物原 色図志 ¹⁷⁾	米口袋 (紫花地丁, 大根地丁)		<i>Amblytropis multiflora</i>		Leguminosae	
	布氏紫堇 (小根地丁, 地丁草)		<i>Corydalis bungeana</i>		Papaveraceae	
	東北堇菜 (地丁草)		<i>Viola mandshurica</i>		Violaceae	
嶺南采薬録 ¹⁸⁾	黄花地丁		<i>Taraxacum officinale</i>		Compositae	
	紫花地丁		<i>Viola patrinii</i>		Violaceae	
	紫花地丁		<i>Gentiana</i> sp.		Gentianaceae	

TABLE I. (つづき)

	名 称	基 源	植 物
中 草 葯 学 ¹⁹⁾	地丁草 (紫花地丁, 苦地丁, 地丁紫堇)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
	甜地丁 (地丁)	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
	鷄眼草 (紫花地丁, 地丁草)	<i>Kummerowia striata</i>	Leguminosae
	瓜子金 (竹葉地丁, 紫花地丁)	<i>Polygala japonica</i>	Polygalaceae
	紫花地丁	<i>Viola yedoensis</i>	Violaceae
		<i>Viola japonica</i>	Violaceae
		<i>Viola betonicifolia</i> subsp. <i>nepalensis</i>	Violaceae
		<i>Viola mandshurica</i>	Violaceae
	白花地丁	<i>Viola patrinii</i>	Violaceae
中 葯 大 辞 典 ²⁰⁾	紫花地丁	<i>Gentiana loureirii</i>	Gentianaceae
	尋骨風 (地丁香)	<i>Aristolochia mollissima</i>	Aristolochiaceae
	草金杉 (糙葉地丁)	<i>Pentanema indicum</i> var. <i>hypoleucum</i>	Compositae
	鴉葱 (黃花地丁)	<i>Scorzonera austriaca</i>	Compositae
	蒲公英 (黃花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	龍胆地丁 (華南地丁)	<i>Gentiana loureirii</i>	Gentianaceae
	石龍胆 (藍花地丁, 紫花地丁)	<i>Gentiana squarrosa</i>	Gentianaceae
	貓脚印 (白花地丁)	<i>Geranium robertianum</i>	Geraniaceae
	真萼黃芩 (滇紫花地丁)	<i>Scutellaria orthocalyx</i>	Labiatae
	甜地丁 (米口袋地丁, 蘿蔔地丁)	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
		<i>Amblytropis pauciflora</i>	Leguminosae
	黃花地丁	<i>Crotalaria albida</i>	Legminosae
	黃花母 (大地丁草)	<i>Sida rhombifolia</i>	Malvaceae
	苦地丁 (地丁, 地丁草)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
	瓜子金 (竹葉地丁, 小葉地丁草)	<i>Polygala japonica</i>	Polygalaceae
	甜遠志 (地丁, 藍花地丁, 紫花地丁)	<i>Polygala sibirica</i>	Polygalaceae
	小丁香 (藍花地丁, 紫花地丁)	<i>Polygala sibirica</i> var. <i>megalopha</i>	Polygalaceae
	天葵子 (地丁)	<i>Semiaquilegia adoxoides</i>	Ranunculaceae
	翻白草 (黃花地丁)	<i>Potentilla discolor</i>	Rosaceae
	石莽草 (紅花地丁)	<i>Polygonum capitatum</i>	Umbelliferae
	紫花地丁 (紫地丁, 地丁草, 堇菜地丁)	<i>Viola yedoensis</i>	Violaceae
	地核桃 (白毛葉地丁草, 地丁草)	<i>Viola collina</i>	Violaceae
	地草果 (紫花地丁)	<i>Viola philippica</i> subsp. <i>malesica</i>	Violaceae
	鐮頭草 (白花地丁)	<i>Viola patrinii</i>	Violaceae
	長萼堇菜 (紫花地丁)	<i>Viola inconspicua</i>	Violaceae
	尼泊爾堇菜 (紫花地丁)	<i>Viola betonicifolia</i> subsp. <i>nepalensis</i>	Violaceae
	犁頭草 (地丁草, 紫地丁, 紫花地丁)	<i>Viola japonica</i>	Violaceae

() は別名を示す。

TABLE II. 近年中国各省で出版された文献にみられる地丁の基源

文 献	生 薬 名	基 源	植 物
北方常用中草薬 手冊 ²¹⁾	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	地丁	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
	紫花地丁 (地丁草)	<i>Viola mandshurica</i>	Violaceae
	布氏紫堇 (地丁)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
東北常用中草薬 手冊 ²²⁾	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	地丁	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
	紫花地丁	<i>Viola mandshurica</i>	Violaceae
河北中薬手冊 ²³⁾	地丁 (紫花地丁)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
山 東 中 薬 ²⁴⁾	地丁 (紫花地丁, 苦地丁)	<i>Corydalis</i> spp.	Papaveraceae
	米布袋 (甜地丁)	<i>Amblytropis</i> spp.	Leguminosae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum</i> spp.	Compositae
山 西 中 草 薬 ²⁵⁾	地丁 (紫花地丁, 苦地丁)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	米口袋 (甜地丁)	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
甘肅中草薬手冊 ²⁶⁾	地丁 (紫花地丁)	<i>Viola patrinii</i>	Violaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
陝 西 中 草 薬 ²⁷⁾	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	紫花地丁	<i>Viola yedoensis</i>	Violaceae
	米口袋 (地丁)	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
江蘇省植物薬材 志 ²⁸⁾	地丁 (地丁草)	<i>Amblytropis multiflora</i>	Leguminosae
	地丁草 (紫花地丁)	<i>Viola yedoensis</i>	Violaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
上海常用中草薬 ²⁹⁾	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	紫花地丁 (地丁草)	<i>Viola yedoensis</i>	Violaceae
	竹葉地丁	<i>Polygala japonica</i>	Polygalaceae
浙江民間常用草 薬 ³⁰⁾	犁頭草 (紫花地丁, 地丁草, 紫地丁)	<i>Viola</i> spp.	Violaceae
	瓜子金 (竹葉地丁, 小葉地丁草, 地 丁, 地丁草, 紫花地丁草)	<i>Polygala japonica</i>	Polygalaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
内 蒙 古 中 草 薬 ³¹⁾	地丁	<i>Amblytropis verna</i>	Leguminosae
	紫花地丁 (地丁草)	<i>Viola japonica</i>	Violaceae
	紫堇 (地丁)	<i>Corydalis bungeana</i>	Papaveraceae
	大丁草 (地丁)	<i>Leibnitzia anandria</i>	Compositae
西藏常用中草薬 ³²⁾	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum tibeticum</i>	Compositae
	紫花地丁	<i>Viola</i> spp.	Violaceae
四川常用中草薬 ³³⁾	苦丁 (苦馬地丁)	<i>Lactuca formosana</i>	Compositae
	独脚茅草 (黄花地丁)	<i>Scorzonera albicaulis</i>	Compositae
	緑花草 (紫花地丁)	<i>Gentiana squarrosa</i>	Gentianaceae
	蒲公英 (地丁草, 黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i>	Compositae
	鐮頭草 (紫花地丁)	<i>Viola patrinii</i> <i>Viola betnicifolia</i> subsp. <i>nepalensis</i>	Violaceae

TABLE II. (つづき)

文 献	生 薬 名	基 減 植 物
湖 南 薬 物 志 ³⁴⁾	匍伏堇 (地丁香)	<i>Viola diffusa</i> Violaceae
	翻白草 (黄花地丁, 地丁)	<i>Potentilla discolor</i> Rosaceae
	石龍胆 (紫花地丁)	<i>Gentiana squarrosa</i> Gentianaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i> Compositae
	薊 (紫花地丁)	<i>Cirsium japonicum</i> Compositae
常用中草薬彩色 図譜 ³⁵⁾	丁癸草 (地丁)	<i>Zornia diphylla</i> Leguminosae
	長萼堇菜 (地丁草)	<i>Viola inconspicua</i> Violaceae
	華南龍胆 (広地丁, 紫花地丁, 地丁, 土地丁)	<i>Gentiana loureirii</i> Gentianaceae
広 西 中 草 薬 ³⁶⁾	地丁 (土地丁, 紫花地丁)	<i>Gentiana loureirii</i> Gentianaceae
広西獣医中草薬 処方選編 ³⁷⁾	一点紅 (紅背地丁)	<i>Emilia sonchifolia</i> Compositae
	小飛揚 (紫花地丁)	<i>Euphorbia thymifolia</i> Euphorbiaceae
	犁頭草 (紫花地丁)	<i>Viola inconspicua</i> Violaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Launaea glabra</i> Compositae
貴 州 草 薬 ³⁸⁾	毛果堇菜 (地丁子, 紫花地丁)	<i>Viola collina</i> Violaceae
	蒲公英 (黄花地丁)	<i>Taraxacum mongolicum</i> Compositae
	溪畔銀蓮花 (地丁子)	<i>Anemone rivularis</i> Ranunculaceae
雲 南 中 草 薬 ³⁹⁾	半枝蓮 (滇紫花地丁)	<i>Scutellaria orthocalyx</i> Labiatae
	响鈴豆 (黄花地丁)	<i>Crotalaria albida</i> Leguminosae
	猫脚印 (白花地丁)	<i>Geranium robertianum</i> Geraniaceae
	犁頭草 (地丁草)	<i>Viola philipica</i> Violaceae
	紫花地丁 (藍花地丁, 地丁)	<i>Polygala sibirica</i> Polygalaceae
	蒲公英 (地丁草)	<i>Taraxacum mongolicum</i> Compositae
	苦遠志 (紫花地丁)	<i>Polygala japonica</i> Polygalaceae
	草金杉 (黄花地丁)	<i>Pentanema indicum</i> var. <i>hypoleucum</i> Compositae

() は別名を示す。

について、*Viola* 属、*Amblytropis* 属およびその付図 (Fig. 6) に形状の類似した植物をもとに考察を行うこととする。

李時珍は「処処有之。其葉似柳而微細，夏開紫花結角。平地生者起莖，溝壑辺生者起蔓。」と述べている。*Viola* 属は葉の形状が円形～心形～披針形～狭披針形であり、「其葉似柳而微細」とはやや異なる。また「平地生者起莖，溝壑辺生者起蔓」とあることから，同属植物で蒴果を形成し，有莖および蔓状になるものの総称と考えられる。*Viola* 属は葉の形状以外はこの記載にあてはまるが，金陵本の付図^{8d)} (Fig. 6) からは *Viola* 属のものとは思われない。*Amblytropis* 属植物はこの記載にはほぼ一致するが，付図から想起することは困難である。そのほか付図に比較的類する植物に *Polygala* 属および *Osbeckia* 属のものがあげられるが，いずれも蔓状にはならず，また *Polygala* 属のものは蒴果を形成せず，*Osbeckia* 属のものは開花時期が8～9月であり，当時の秋に相当するなどの点は李時珍の記述とは異なる。以上述べたごとく，『本草綱目』に収載された紫花地丁はこれに合致するものが見あたらない。しかし地丁の名義が根の形状に由来し，『本草衍義』に記された地丁の基源と思われる *Taraxacum* 属植物は主根が直線状であり，*Amblytropis* 属植物もまたその形状に類似する。従って李時珍が記述した紫花地丁は，付図に難点はあるが，現在しばしば成書に地丁の基源として記される *Amblytropis* 属植物であると推定する。但し『滇南本草』，『医方類聚』にみられるように当時すでに基源の異なった紫花地丁が出廻っており，李時珍は積名，附方の項で種々の文献を引用しているところから，それらをまとめて紫花地丁の項に記載したものと思われる。

『本草原始』^{41a)} には地丁として「地丁，生山南巖石及高岡上，苗覆地春生葉青小花開紫白二種入藥宜用紫花者，根直如釘故俗每呼為紫花地丁，又有一種如藕根本經一名列當一名草蓂蓉，俗因花紫呼為紫花地丁，味甘溫無毒，主男子五勞七傷，補腰腎冷人有子去風血，煮及浸酒服之，又主惡瘡痔漏」とある。列當は『証類本草』^{4b), 5b)} に「列當味甘溫

TABLE III. 医書、本草書に記載された地丁の名称および薬効

	名 称	使用部位および使用法	薬 効
太平聖恵方 ²⁾	地丁		〔地丁散方：一切悪瘡丁腫毒瘡人不識者〕
証類本草 ^{4a,5a)}	蒲公英（地丁）	水煮汁飲。取根茎白汁塗。搗傳腫上。	乳癰腫。瘡。惡刺，狐尿刺
滇南本草 ⁶⁾	羊乳地丁	点水酒，童便服。	治寒熱往来，子午潮熱，散風寒，解汗。
	白花地丁	煎点水酒服。	痔瘡生管。
	紫花地丁	新瓦焙為末，搽潰處愈。	解諸瘡毒。攻癰疽腫毒。治疥癩癰瘡，消腫。
	紫花地丁（丁蒿，地丁）	点無灰酒下。	一切癰疽發背，疔腫瘰癧，無名腫毒惡瘡。
	黃花地丁		消痰，定喘，止咳嗽。
医方類聚 ⁷⁾	紫花地丁		〔消毒散：丁瘡毒氣入腹昏悶不食〕
	紫花地丁草	搗水。	丁腫垂死
	地丁草		〔革麻散：丁瘡〕
	蒲翁盈（黃花地丁）		〔渴腫湯：治諸腫痛不消，或筋脉拘攣不能屈伸〕
	紫花地丁（米布袋）	取根數乾用四個半頭搏壘成爐子燒著地丁用絡毬甑壹枚蓋子使令罇眼內煙出薰惡瘡。	惡瘡。
	黃花地丁		〔外用潰毒藥：治諸腫毒堅硬不消〕
	紫花地丁（羊蹄根）		〔四圍敷藥：化毒散血拔毒散治壹應諸惡瘡并脚疾〕
本草綱目 ⁸⁾	蒲公英（黃花地丁）	搗爛覆。搗汁和酒煎服。	〔乳癰腫，解食毒，散滯氣，化熱毒，消惡腫，結核，丁腫，疹牙，烏須髮，壯筋骨。塗惡刺，狐尿刺瘡。〕
	紫花地丁	〔末服酒，嚼咽下。葉入醬少許研膏点入取吐。貼之。搗汁服。根日乾以罐燒烟对瘡熏之。〕	一切癰疽發背，疔腫瘰癧，無名腫毒惡瘡。
証治準繩 ⁴⁴⁾	地丁草（大薊）		〔雄麝湯：解行毒〕
	紫花地丁		〔紫花地丁散：治諸惡毒瘡腫痛〕
	紫花地丁		〔破棺丹：治行瘡走黃不止〕
	地丁草		〔地檢防風散：治風在半表裏頭微汗身無汗不可發汗并治表裏〕
本草原始 ⁴¹⁾	蒲公英（地丁）	水煮汁飲。取根茎白汁塗之。	癰腫，乳癰。惡刺，狐尿刺痛。
	地丁（紫花地丁，草薺蓉）	煮及浸酒服之。	男子五勞七傷，補腰腎，令人有子，去風血。惡瘡痔漏。
本草彙言 ⁴⁵⁾	紫花地丁	搗汁和生酒服。滓數菴患上，搗汁服。末白湯調服。	一切惡瘡行毒，癰疽諸發疔腫。一切無名惡毒，黃疸內熱。
	白花地丁	搗汁隔溫。	痘發毒，定喘。
本經逢原 ⁴⁶⁾	地丁		疔腫惡瘡，癰疽發背，無名腫毒。
植物名実図考 ⁹⁾	董董菜（紫花地丁）	根，葉搗傳。	諸腫毒。
	紫花地丁		
	紫花地丁		一切癰疽發背，疔腫，瘰癧，無名腫毒，惡瘡。
	瓜子金（紫花地丁）	新瓦焙為末，搽患處効。	破血，解諸毒，攻癰疽，腫毒，治疥癩，癰瘡。治小兒走馬牙疳潰爛。
本草備要 ⁴⁷⁾	蒲公英（黃花地丁）	搗敷。擦。白汁塗。搗汁酒服。	化熱毒，解食毒，消腫核，治乳癰，疔毒，擦牙烏髭髮，惡刺。
	紫花地丁		癰疽發背，疔腫瘰癧，無名腫毒。

（ ）は別名，〔 〕は処方中に地丁の名がみられることを示す。

TABLE IV. 文献に記載された地丁の基源植物および名称

科 名	基 源 植 物	名 称
Aristolochiaceae	<i>Aristolochia mollissima</i>	地丁香
Compositae	<i>Cirsium japonicum</i>	紫花地丁
	<i>Emilia sonchifolia</i>	紅背地丁
	<i>Lactuca formosana</i>	苦馬地丁
	<i>Launaea glabra</i>	黃花地丁
	<i>Leibnitzia anandria</i>	地丁
	<i>Pentanema indicum</i> var. <i>hypocephalum</i>	糙葉地丁, 黃花地丁
	<i>Scorzonera alubicaulis</i>	黃花地丁
	" <i>austriaca</i>	黃花地丁
	<i>Taraxacum mongolicum</i>	黃花地丁, 地丁草
	" <i>officinale</i>	黃花地丁
Euphorbiaceae	" <i>platycarpus</i>	黃花地丁, 地丁花, 地丁草, 地丁
	" <i>tibeticum</i>	黃花地丁
Euphorbiaceae	<i>Euphorbia thymifolia</i>	紫花地丁
Gentianaceae	<i>Gentiana detonsa</i>	紫花地丁, 地丁
	" <i>loureirii</i>	地丁, 華南地丁, 龍胆地丁, 広地丁, 紫花地丁, 土地丁
	" <i>squarrosa</i>	紫花地丁
	<i>Swertia</i> sp.	紫花地丁, 地丁
Geraniaceae	<i>Geranium robertianum</i>	白花地丁
Labiales	<i>Scutellaria indica</i>	紫花地丁
	" <i>orthocalyx</i>	滇紫花地丁
Leguminosae	<i>Astragalus scaberrimus</i>	紫花地丁, 地丁
	<i>Amblytropis brachyptera</i> var. <i>elongata</i>	紫花地丁
	" <i>multiflora</i>	紫花地丁, 地丁, 地丁草, 紫地丁, 地丁花, 甜地丁, 米口袋地丁, 蘿葡地丁, 大根地丁
	" <i>pauchifolia</i>	甜地丁, 米口袋地丁, 蘿葡地丁
	" <i>stenophylla</i>	紫花地丁
	" <i>verna</i>	地丁
	<i>Crotalaria albida</i>	黃花地丁
	<i>Kummerowia striata</i>	地丁草, 紫花地丁
	<i>Vicia amoena</i>	紫花地丁
	<i>Zornia diphylla</i>	地丁
Malvaceae	<i>Sida rhombifolia</i>	大地丁草
Melastomataceae	<i>Osbeckia chinensis</i>	地丁
Papaveraceae	<i>Corydalis bungeana</i>	紫花地丁, 地丁, 地丁草, 苦地丁, 小根地丁, 布氏紫堇地丁, 地丁紫堇
	" <i>pallida</i>	黃花地丁
Polygalaceae	<i>Polygala japonica</i>	竹葉地丁, 紫花地丁, 小葉地丁草, 地丁, 地丁草
	" <i>sibirica</i>	地丁, 紫花地丁, 藍花地丁
	" <i>sibirica</i> var. <i>megalopha</i>	紫花地丁, 藍花地丁
Ranunculaceae	<i>Anemone rivularis</i>	地丁子
	<i>Semiaquilegia adoxoides</i>	地丁
Rosaceae	<i>Potentilla discolor</i>	黃花地丁, 地丁

TABLE IV. (つづき)

科名	基源植物	名称
Umbelliferae	<i>Polygonum capitatum</i>	紅花地丁
	<i>Viola betonicifolia</i> subsp. <i>nepalensis</i>	紫花地丁
	” <i>collina</i>	地丁草, 白毛葉地丁草, 地丁子, 紫花地丁
	” <i>diffusa</i>	地丁香
	” <i>grypoceras</i>	紫花地丁
	” <i>inconspicua</i>	紫花地丁, 地丁草
	” <i>japonica</i>	地丁草, 堇菜地丁, 紫花地丁, 紫地丁
	” <i>lactifolia</i>	地丁, 紫花地丁
	” <i>mandshurica</i>	地丁草, 紫花地丁
	” <i>oblongo-sagittata</i> var. <i>violascens</i>	紫花地丁
Violaceae	” <i>patrinii</i>	紫花地丁, 白花地丁, 地丁
	” <i>phylipica</i>	地丁草
	” <i>phylipica</i> subsp. <i>malesica</i>	紫花地丁
	” <i>yedoensis</i>	紫花地丁, 地丁草, 堇菜地丁, 紫地丁

無毒, 主男子五勞七傷, 補腰腎冷人有子去風血, 煮及浸酒服之, 生山南巖石上如藕根, 初生掘取陰乾亦名栗當一列草
 蓯蓉」とあり, したがって『本草原始』に記された地丁は『証類本草』の列當の記文の配列を変え, さらに地丁に関
 する事項を挿入したものである. ところでその付図 (Fig. 5) をみると, 葉は対生し, 葉柄および花柄が根の基
 部から叢生し, 主根が直線状であり, また『中藥志』¹⁵⁾の米口袋の図 (Fig. 5) に類似するところから, このものは
Amblytropis multiflora またはその近縁種と考えられる. また『本草原始』には肉蓯蓉の項^{41b)}に「…又一種生巖石,
 亦類肉蓯蓉但乾枯瘦小, 一名列當一名草蓯蓉」とあり, その付図 (Fig. 7) に「草蓯蓉俗呼紫花地丁」と記されている.
 草蓯蓉はハマウツボ科 *Orobanchaceae* の *Orobanche* 属植物があてられており^{20c)}, その根はひげ根状である. とこ
 ろが肉蓯蓉の付図 (Fig. 7) の下部には直線状を呈する主根が画かれている. これは恐らく茎が直線状で釘状を呈す
 るところから地丁の名が付され, 名義に基づいて直線状の根を画いたのであろう. その後草蓯蓉に地丁をあてた文献
 はほとんど見あたらず, 『本草綱目啓蒙』^{53a)}に列當の別名として紫花地丁の名がみられるが, このものは『本草原始』
 を引用したものである.

『滇南本草』には「白花地丁」が収載されており^{6b)}, 「白花地丁, [気味苦, 甘, <性>, 平]. [清熱解毒, 散瘀消
 腫]. [主治酒痔, 血痔, 牝痔, 牡痔], 痔瘡生管. 単劑煎点水酒服. [医家諸藥不効, 服此神効]」とある. このもの
 は各種痔瘡に応用する点でこれまでに述べた地丁の薬効とはやや異なる. 白花地丁は『本草彙言』の紫花地丁の項⁴⁵⁾
 に「治痘發毒盛作喘. 取白花地丁搗汁. 隔湯溫服半盞立時解毒定喘.」とあり, 『滇南本草』の白花地丁とは薬効が異
 なっており, 別物と思われるが, いずれもこの記述だけでは基源の考察は不可能である.

4. 清代以降の地丁について

清代前半に出版された各種本草書は『本草綱目』に記された地丁を引用しているのみである. 清代後半の『植物名
 実図考』では4種の紫花地丁が収載され, その基源についてはすでに述べた. その後各種の成書には, TABLE I,
 TABLE II に示したごとく, きわめて多くの地丁類が記され, 14科28属50数種におよぶ植物が挙げられている (TABLE
 IV). 近年中国各省で出版された中草藥の書籍によると (TABLE II), 使用されている地丁の基源植物には地域差が
 みられる. すなわち *Viola* 属, *Taraxacum* 属植物はほぼ中国全域にわたって用いられているが, 北部ではそのほか
Amblytropis 属, *Corydalis* 属のものも用いられ, また南部では *Gentiana* 属, *Polygala* 属のものをはじめ多種類の
 植物が使用されている. これは地丁の名義および『本草綱目』などの文献記載をもとに, その土地に生育する植物に
 地丁の名を付し, 用いてきたためであろう.

5. 日本における地丁について

日本では岡本一抱が『本草綱目』にある紫花地丁の一部を『和語本草綱目』⁵⁴⁾に転載したのが最初で, 「紫花地丁苦
 辛甘, 治癰腫發背癰瘰無名腫毒惡瘡」とある. 紫花地丁に和名を与えたのは貝原篤信で, 『大和本草』⁴⁰⁾に「紫花地丁古
 歌ニスミレトヨミシ物是ナリ, 花紫ナリ又白花アリ……」とある. これは『本草綱目』に記された紫花地丁の積名に
 箭頭草が挙げられ, 箭頭草は以前から *Viola* 属植物を指しているところから, 貝原篤信は紫花地丁にスミレをあてた

のであろう。しかし寺島良安は『和漢三才図会』⁵⁵⁾で、「…紫花地丁者今云蓮華花而本綱之註亦能當矣 然畫図之形狀不似蓮華花故不決」と述べ、*Astragalus* 属と思われる図 (Fig. 8) を載せている。以後『本草綱目啓蒙』^{53b)}、『手板発蒙』^{56a)}、『救荒本草啓蒙』⁵⁷⁾、『草木図説』⁵⁸⁾、『本草図譜』⁵⁹⁾などには紫花地丁としてスミレ類をあてている。また『本草綱目啓蒙』^{5a)}には列當の和名にハマウツボをあげ、「一名紫花地丁」とあり、『手板発蒙』^{56b)}には大薊として地丁草を記しているが、これらは『本草原始』、『証治準繩』などの記載を引用したものである。近年の日本の成書に収載された地丁は、いずれもこれまでに記載されたものを引用しているのみであり、また地丁が市場に出廻ることもないようである。

結 論

1. 「地丁」の名義は薬効に由来し、病巣が釘状を呈する丁瘡の治療に際し、植物の根が釘状を呈するものに地丁の名を付し、その治療に応用するようになったことによる。その主たる基源植物は *Taraxacum* 属あるいは *Amblytropis* 属のものであると考証する。しかし地丁の名称は一般的表現であるため、各地でこの名義に適合する種々の植物に対して地丁の名が用いられ、丁瘡、悪瘡等に応用されるようになったと考えられる。地丁が別名として記されることが多いのはこの理由によると思われる。近代の成書には地丁として14科28属50数種に及ぶ基源植物が記載されているが、異物同名品が多数見受けられ、特に地丁、紫花地丁、黄地丁が大半を占める。これらの名称は混乱を招くので、華南地丁、莖菜地丁などの如く、その土地の名あるいは植物の特徴に因んだ名称を地丁に付すなどして整理統一を図るべきであろう。

2. 近代の成書に記された地丁および中国各地に出廻っている地丁の中で、最も多く見受けられるのは *Viola* 属に由来するものである。これは古来 *Viola* 属が地丁の名義に基づいて使用され、しかも中国に生育する *Viola* 属は基本種で数10種を越え分布域が広いため、形状の類似したものが種々用いられてきたと考えられる。前報⁴³⁾では *Viola* 属を基源とする地丁に 5 type のものが確認され、その基源について述べたが、市場にはさらに多くの *Viola* 属地丁が出廻っているものと思われる。

3. 『本草綱目』に収載された紫花地丁は、それまでに記載された地丁をまとめて述べたものである。ただし李時珍が観察して記したものは *Amblytropis* 属植物であると考察する。『本草原始』に記された地丁は、その付図から *Amblytropis multiflora* またはその近縁種であると推定する。また『植物名実図考』に記された紫花地丁のうち、1種は『本草綱目』を引用したものであるが、他の3種はその付図から *Viola* 属、*Scutellaria* 属および *Polygala* 属の各植物であると思われた。

引用文献および注

- 1) 第8報：布目慎勇，難波恒雄，生薬，38，19（1984）。
- 2) 王懷隱，『太平聖恵方』，人民衛生出版社，北京，1982，p. 2027。
- 3) 寇宗奭，『本草衍義』，卷12，3丁，武昌医館重刊元本，宣統2年（1910）版。
- 4) a) 唐慎微，『大観本草』，国立中国医薬研究所，台北，1972，p. 323；b) 同上，p. 326。
- 5) a) 唐慎微，『重修政和經史証類備用本草』，人民衛生出版社，北京，1957，p. 281；b) 同上，p. 285。
- 6) a) 蘭茂，『滇南本草』，第2巻，雲南人民出版社，昆明，1977，p. 503；b) 同上，第3巻，1978，p. 82；c) 同上，第3巻，p. 92；d) 同上，第3巻，p. 126。
- 7) a) 世宗，『医方類聚』，東洋医科大学，ソウル，1965，p. 6407，6409；b) 同上，p. 6414；c) 同上，p. 6835；d) 同上，p. 6892；e) 同上，p. 6894；f) 同上，p. 6840。
- 8) a) 李時珍，『本草綱目』，卷16草部，湿草類，春陽堂，東京，1978，p. 1109；b) 同上，卷27菜部，柔滑類，p. 1664；c) 同上，附図，上巻，1979，p. 94。
- 9) a) 吳其濬，『植物名実図考』，中華書局，北京，1963，p. 337；b) 同上，p. 331；c) 同上，p. 301；d) 同上，p. 383。
- 10) 松村任三，『植物名彙』，前編，漢名之部，丸善，東京，1915，p. 98，99，155，331，378。
- 11) 佐々木舜一，『台湾民間薬用植物誌』，晃文館，台北，1923，p. 15。
- 12) 久保田晴光，岡西為人，『和漢薬標本目録』，満州医科大学，奉天，1931，p. 41。
- 13) T. Ishidoya, "Chinesische Drogen," I, 1933, p. 31; IV, 1941, p. 15, Pharmakologischen Institute der Kaiserlichen Universität, Keijo.
- 14) 木村康一，木島正夫，『和漢薬名集』，廣川書店，東京，1946，p. 106。

- 15) 中国医学科学院藥物研究所等編,『中藥志』,Ⅲ,人民衛生出版社,北京,1961,p.67.
- 16) 南京藥學院,藥材學教研組編,『藥材學』,人民衛生出版社,北京,1963,p.420.
- 17) 沈陽藥學院,『東北藥用植物原色圖志』,科學普及出版社,北京,1962,p.142.
- 18) 蕭步丹,『嶺南采藥錄』,莊兆祥增訂,現代中醫藥學院,香港,1970,p.135.
- 19) 南京藥學院《中草藥學》編寫組編,『中草藥學』,江蘇人民出版社,1976,p.344~5,478~480,567~8,675~6.
- 20) a) 江蘇新醫學院編,『中藥大辭典』,上海科學技術出版社,1978,p.246,334,600,611,758,800,819,823,976,1279,1290,1584,1642,2051,2071,2165,2174,2178,2208,2459,2705; b) 同上,p.854.
- 21) 北京部隊後勤部衛生部等編,『北方常用中草藥手冊』,人民衛生出版社,北京,1971,p.232.
- 22) 沈陽部隊後勤部衛生部編,『東北常用中草藥手冊』,遼寧省新華書店,沈陽,1970,p.156.
- 23) 河北省革命委員會商業局醫藥供應站等編,『河北中藥手冊』,科學出版社,北京,1970,p.110.
- 24) 山東衛生幹部進修學院編著,『山東中藥』,山東人民出版社,濟南,1959,p.152~155,182~184.
- 25) 山西革命委員會衛生局主編,『山西中草藥』,山西人民出版社,1972,p.141.
- 26) 甘肅省革命委員會衛生局編,『甘肅中草藥手冊』,第1冊,甘肅人民出版社,蘭州,1970,p.184.
- 27) 陝西省革命委員會衛生局編,『陝西中草藥』,科學出版社,西安,1971,p.53,55.
- 28) 中國科學院植物研究所南京中山植物園,『江蘇省植物藥材志』,科學出版社,北京,1958,p.535.
- 29) 《上海常用中草藥》編寫組,『上海常用中草藥』,上海新華書店,上海,1970,p.114,362.
- 30) 浙江省革命委員會生產指揮組衛生局主編,『浙江民間常用草藥』,第2集,浙江人民出版社,杭州,1970,p.98,220.
- 31) 內蒙古自治區革命委員會衛生局編,『內蒙古中草藥』,內蒙古自治區人民出版社,1972,p.102.
- 32) 西藏自治區革命委員會衛生局等編,『西藏常用中草藥』,西藏人民出版社,拉薩,1971,p.96.
- 33) 四川省中藥研究所編,『四川常用中草藥』,四川人民出版社,成都,1972,p.741,1211,1217,1293.
- 34) 湖南中醫藥研究所編,『湖南藥物志』,第1輯,湖南人民出版社,長沙,1970,p.451~2,815~6;第2輯,1972,p.252,768,820.
- 35) 中國醫學科學院藥物研究所革命委員會,浙江中醫學革命委員會編,『常用中草藥圖譜』,人民衛生出版社,北京,1970,p.87,134.
- 36) 廣西壯族自治區革命委員會衛生管理服務站編,『廣西中草藥』,第2冊,廣西人民出版社,南寧,1970,p.398.
- 37) 廣西獸醫研究所編,『廣西獸醫中草藥處方選編』,廣西人民出版社,南寧,1974,p.72,100,442,478.
- 38) 貴州省中醫研究所編,『貴州草藥』,第1集,貴州人民出版社,貴陽,1970,p.294;第2集,p.1032.
- 39) 雲南省衛生局革命委員會編,『雲南中草藥』,雲南人民出版社,昆明,1971,p.304,562,740,770,798;統集,1973,p.352,416.
- 40) 貝原篤信,『大和本草』,第1冊,有明書房,東京,1975,p.240.
- 41) a) 李中立,『本草原始』,明曆3(1657)年日本重刊本,卷四,三十五~三十六丁; b) 同上,卷二,十二~十三丁; c) 同上,卷二,二十四丁.
- 42) 巢元方,『諸病源候論』,人民衛生出版社,北京,1980,下冊,p.864.
- 43) 第6報,布目慎勇,難波恒雄,生藥,37,209(1983).
- 44) a) 王肯堂,『証治準繩』,外科準繩,新文豐出版,台北,1974,卷2,44丁; b) 同上,卷2,46丁; c) 同上,卷2,50丁; d) 同上,卷5,15丁; e) 同上,卷6,35丁.
- 45) 倪朱謨,『本草彙言』,大成齋重刊,1645,52丁.
- 46) 張璐,『本經逢原』,四川人民出版社,1957,卷2,p.72.
- 47) 江昂,『本草備要』,商務印書館,香港,1954,卷1,p.123.
- 48) a) 吳謙,『醫宗金鑑』,大中國圖書,台北,1969,下冊,卷下,p.90; b) 同上,p.91.
- 49) 李梴,『醫學入門』,台聯國風出版社,台北,1968,p.594.
- 50) 文山遯叟選,『清宮秘方大全』,自由出版社,台北,1969,p.330.
- 51) 蘇敬等,『新修本草』,國立中國醫藥研究所,台北,1964,p.270.
- 52) a) 朱橚,『救荒本草』,嘉靖4年刊本,中華書局,北京,1959,上之前,59丁; b) 同上,上之後,56丁.
- 53) a) 小野蘭山,『本草綱目啓蒙』,早稻田大學出版部,東京,1974,卷8,p.28; b) 同上,卷12,p.67.
- 54) 岡本一抱,『和語本草綱目』,整文堂藏版,春陽堂,東京,1975,p.704.

- 55) 寺島良安,『和漢三才図絵』,東京美術,東京,1975, p. 240.
- 56) a) 大阪屋四郎兵衛,『手板発蒙』(増補),楽只堂蔵版,1818,十四丁; b) 同上,二十八丁.
- 57) 小野蕙畝(口授),『救荒本草啓蒙』,博文館蔵版,1903,卷3, p. 9.
- 58) 飯沼慾斎,『草木図説』,東京成美堂,東京,1908,卷17, p. 1161.
- 59) 岩崎常正,『本草図譜』,本草図譜刊行会,東京,卷17, p. 20.